

# キッズゲルニカ国際こども平和壁画制作プロジェクト 異文化理解と美術教育の可能性

水 口 薫

## 要 旨

1995年から始まったKids' Guernicaキッズゲルニカ国際こども平和壁画制作プロジェクトは、「子どもによる絵画制作」を通して平和のメッセージを描くという国際的なアート・プロジェクトである。パブロ・ピカソが、1937年に制作した「ゲルニカ」と同じサイズ（3.5m×7.8m）の絵に、子どもたちが平和のメッセージを込めて、描くというもので、1995年から2001年までの1期と2001年以降の2期の活動で、これまでに40カ国以上、160点を超す作品が制作されている。この歴史と作品制作の過程、技法、ワークショップや展覧会を通しての異文化理解と美術教育の実践例の紹介と可能性を考察した。

キーワード：ゲルニカ、キッズゲルニカ、異文化理解、平和教育、美術教育

## はじめに

スペインの画家パブロ・ピカソPablo Picasso（1881-1973）は、20世紀を代表する芸術家で、油絵、素描、版画、彫刻、舞台装置など幅広い分野と独自の様式による創作活動を行い、キュビズムCubism<sup>1)</sup>を創始した。スペイン市民戦争、国王の共和国軍とフランコ將軍の反乱軍との内戦で、1937年4月26日、フランコを支援するドイツ空軍によって、バスク地方の都市ゲルニカへの無差別爆撃が行われ、無防備な市民が殺害された。パリ万博スペイン館の壁画制作を依頼されたピカソは、その悲惨な現状と抗議をこめて壁画を描いた。6月4日「ゲルニカGuernica」を完成、発表は、絵画による戦争否定、平和を願うメッセージを発信する作品となった。

## Kids' Guernicaキッズゲルニカ・プロジェクトの始まり

このプロジェクトを始めたのは、Art Japan (アート・ジャパン) 研究会で、1995年から2001年9月までキッズゲルニカの活動、運営を行った。アート・ジャパン研究会は、1992年、日本の京都を拠点に、非営利活動で、芸術、文化の活動及び情報発信を研究する研究会として始まり、画家、染織作家、舞踊家、大学教授、教員、博物館・美術館学芸員、研究所研究員、芸術・文化に関心のある一般人など幅広い層で構成されていた。代表の安田正は、読売テレビのディレクター、プロデューサーの経歴を持ち、番組制作において、芸術、文化の商業性に疑問を持っており、フランス・ドイツ共同出資のテレビ局アルテArte<sup>2)</sup>のような「芸術文化チャンネル」を日本で開設することを考えていた。

アート・ジャパン研究会は、それに合わせ、芸術・文化の講演会、衛星チャンネルの疑似放送イベントの企画を行っていた。しかし、衛星チャンネルの開設、維持には、莫大な資金が必要であり、その出資者の目途も立たない状態であった。1994年、衛星チャンネルの開設を待たずに、研究会の活動を一歩進める形で、芸術・文化情報を収集、Art Japan Network (アート・ジャパン・ネットワーク) として、インターネットにおける情報発信を行うことにした。取材地域は、スタッフ、経費の関係で、京都を中心とした関西圏に限られた。ギャラリーの展覧会情報、画家、作家へのインタビューは、映像記録も合わせて行った。Web上での情報は、当時の通信回線的能力から文字情報と静止画情報でスタートした。一部、実験的に、映像情報をWebホームページで提供したが、専用ソフトのダウンロード、利用者のコンピューター能力などの問題で満足できるものでは無かったため、映像を使った情報発信は、講演会等において補った。

既存の作家、伝統的な文化だけでなく、新進気鋭、新しい表現、発想、活動を行う作家、イベント活動の紹介、インタビューなどを積極的に行った。アート・ジャパンとして、独自の活動を計画することとなり、代表の安田正、メンバーの大阪女子短期大学で美術教育、幼児教育を教える阿部寿文助教授(現・教授)、京都府京都文化博物館映像資料室長を退職した水口薫(現・大手前大学メディア・芸術学部教授)の三人で検討を行った。

翌年の1995年は、第二次世界大戦終結50周年にあたることから「平和」をテーマにした絵画制作イベントが、まず浮かんだ。1994年は、国連で採択された「子どもの権利条約」<sup>3)</sup>を日本が批准し、発効した年であったことから「子ども」が主役で、世界の子どもが絵を描くことが考えられた。次に、インパクトのあるイベントと言うことで大きな絵を描くことが提案された。大きな絵で、戦争の悲惨さを描いた作品に、スペインの画家パブロ・ピカソによる「ゲルニカ (1937)」があることは有名であるので、その壁画の大きさ349.3×776.6cmと同じサイズのキャンバスに描くことで、プロジェクトの名前を

「キッズゲルニカ Kids' Guernica」とすることが決まった。

世界の色々な国の子どもと一緒に絵を描くことなどが案として挙がったが、戦争や憎しみの中には、お互いの国の文化、歴史、宗教などの違いによることが起因するものもあることから、それぞれの国の子どもたちが描いた壁画から異文化を知り、理解すること、「平和」とは何か、「共存」とは何かを考える機会を作る目的で、世界中を巡回することにした。

「キッズゲルニカ」の基本理念は、ピカソの制作した「ゲルニカ」と同じサイズ(3.5m×7.8m)の絵に、子どもたちが平和のメッセージを込めて、描くというものである。それ以外には、技法、内容、制作期間に関しての制約は何もない。

子どもの年齢は、「子どもの権利条約」で18歳未満を「児童（子ども）」と定義しているので高校生以下を想定していたが、敢えて条件にはしなかった。壁画作品の所有権、著作権に関しては、参加した子ども、実施した組織、団体、経費を負担した者には、一切無いものとした。これはアート・ジャパンにおいても同じであった。

理由は、制作したキッズゲルニカの壁画作品は、ある数、完成した段階で、多くの人々に見てもらう機会として展覧会を開催すること。それは日本以外の国々においての展覧会開催も想定していた。不慮の事故、運搬、展示による物理的な損傷は、国内を問わずありうるので、その損害賠償請求などの要求をしないこと。管理、保存の問題が出てくるので、世界各地で分散、保存、展示を行い、ある期間が過ぎた時点で、作品の入れ替えを行い、違った視点、組み合わせの展覧会が開催できること。損傷した作品は、それ以上の損傷を防ぐために、美術館、企業、個人で保存、管理を行い、作品はデジタル複製したデータのWebでの公開、展示には、プリントアウトしたものを利用することとした。

## ワークショップの開催

ワークショップをどこで行うかが検討課題となった。日本の京都から行くことも考えられたが、阿部と壁画を題材にした美術教育研究で旧知のアメリカ・フロリダ州立大学美術教育学部教授トム・アンダーソン Tom Anderson が、壁画の機能を「コミュニティー・ミューラル Community Mural」（地域社会の壁画）という論文を発表していることから、彼に呼びかけ、最初のワークショップをフロリダ州立大学で行うことになった。

アンダーソンは、キッズゲルニカのテーマを「平和の贈り物 A gift of Peace」、中心

メッセージを「文化のイクオリティequality (平等性)」と「ノーマライゼーションnormalization (等生化)」として、1995年7月6日、ミーティングに参加したアフリカン・アメリカンの子どもたちに、「ヒロシマ」の原爆について説明、日本の子どもたちへの平和の贈り物をどのようなものにするか考えさせ、12日から15日の4日間のワークショップへとつなげた。

黄色い太陽、緑の海に、「平和の贈り物A gift of Peace」と書かれたリボンがアメリカと日本を結んでいる。青い空に子どもたちが浮かび、黒いカラスが平和のメッセージをくわえて飛んでいる。キャンパスの周りに25cm幅で設けられた部分には、4日間全部に参加しない子どもたちがパッチワークのように小さな絵を描いた。絵を描くことは出来ないハンディキャップのある子が車椅子に乗って鑑賞することでワークショップに参加した。

完成パーティーで、民族音楽やダンスを披露、自分たちのアイデンティを壁画制作だけでなく、記録された映像によっても紹介する機会を作った。映像記録は、その後のワークショップの基本となった。アメリカの観念色を使った太陽や海、日本では嫌われ者のカラスは、賢く信頼のおける鳥とされているなど、次のワークショップを開催した日本の子どもたちには新しい発見となった。(参照：p.192図版)



キッズゲルニカ・アメリカ・タラハシ市・フロリダ州立大学 (1995)

## 日本のワークショップ

阿部が、フロリダから持ち帰ったキッズゲルニカを前にして、日本の最初のワークショップが、7月29日から徳島県立近代美術館で行われた。子どもたちは、事前に両親や学校の先生から戦争について聞き、準備をした。絵画表現の「技術」を見せるのではなく、子どもらしい表現を目指した。テーマは「平和の架け橋」として、青い海の地球、アメリカ大陸と日本の間に鳴門大橋が伸び、空の気球から「平和の夢をみんなのものに」の垂れ幕が下がっている。自然保護、大樹、魚、鳥、花、阿波踊り、手をつなぐ子どもたちが描かれた。人物表現には、日本の子どもたちの特徴のコミックの影響がみられた。

10月28日から韓国の国立仁川教育大学校でのワークショップは、盧在又名誉教授のコーディネートで始まった。仁川広域市北部地区の小学校から1校1名ずつ選抜された子どもたちは、外国からの侵略の歴史と現在の状況を学び、テーマを「我らの平和は南北統一から」として、「手と手をつないで平和に向かう」「21世紀を担う子どもたちの未来」をメッセージにした。テーマを書いた横断幕を2羽の鳥が広げている下に、朝鮮半島を守った祖国の英雄、民族衣装チョゴリを着た子どもたち、手をつなぐ色々な民族の子どもを描いた。アメリカ、日本、韓国とワークショップがつながってきたことから、長い幕でメッセージを表すという表現や各国の国旗を描くという表現が同じようになった。

4枚目のパプアニューギニアのワークショップ（1996.1.16-19）から前回のワークショップのキッズゲルニカのテーマや絵の内容に影響されない、それぞれの民族、風土、自然、歴史と文化を描くようになって行った。

## 表現方法の多様化

紛争のあるアジアの国では、ストレートに戦争の影響が表現されていた。インド・コルカタ市（旧称カルカッタ）（1996）の作品は、国のまわりを囲む戦車がバングラデシュからの難民の流入を防いでいること、クウェート（1996）では、イラクの侵攻によって捕虜になり未だに戻ってこない父や家族を象徴する縛られた手が描かれ、「POW：Prisoner of War」の文字がある。（参照：カラー図版）

平和教育が行われている日本では、子どもだけでなく、大人も「POW」の意味を知らないのが普通で、平和＝自然保護・環境の図式で、地球、太陽、虹、木々、海や山の自然を描く作品や緑やピンクの色の多用、アニメ・マンガのキャラクターの表現が増えて行った。平穏で、経済的に安定しているアジアの国では、身の回りの風景、祭り、文化、民族衣装の子どもを描くという、アイデンティティの確認の表現が見られた。

子どもの美術教育が進んでいるヨーロッパや先進国でのワークショップでは、コーディネート、指導する人が美術教育者である場合が多く、日ごろの美術教育の延長線上でのキッズゲルニカ制作となるので、抽象的な表現、幾何学的な文様、斬新な構図など、新しいデザイン表現の作品が生まれていた。これは指導者の独りよがりの指導でなく、参加した子どもたちも一緒に考え、意見を出し合った上での作品制作であった。

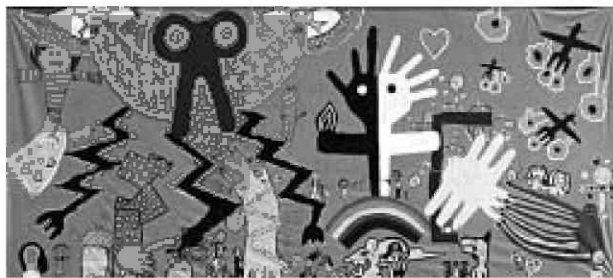
特に、フランス・ボンピドーセンター・子どもアトリエで、子どもに指導するボリス・ティソBoris Tissotのワークショップは、毎回、メッセージ性、表現方法において、新しい試みをしていた。

パリ・ボンピドーセンターのワークショップ（1998）では、全体が赤の背景に、自分

の手形に切り抜いたボール紙をスタンプにして4隅から黒色で押していく、近づいて見ると重なり合った手が暴力を、中央の黄色が平和を表していた。マラコフ市の小学校でのワークショップ(1999)では、白、黒、灰色のモノトーンで、新聞の紙面を描き、写真に当たる部分には、紛争や飛行機、兵器などが写しだされていた。ヨーロッパは、ソビエト連邦、東欧の混乱、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争、中東戦争など、毎日、戦争、紛争の新聞記事が載るのが日常茶飯事であることも子どもたちが題材にした理由であった。

2009年ポンピドーセンター・子どもアトリエでのワークショップは、ゲルニカの3DCG作品<sup>4)</sup>を鑑賞することから始まり、3D空間を自在にウォークスルーことによって、描かれた人、動物の叫び、苦悩、表情を感じた。次にゲルニカ空爆のドキュメンタリーを見て、現実に関わった戦争の悲劇を理解した上で、今までに制作された世界のキッズゲルニカに描かれている内容の分類を行った。子どもたちは、それぞれキーワードを見つけ、戦争の悲惨さを一枚の絵で表現してみた。

ピカソ美術館パリへ行き、ピカソの絵を鑑賞、自分たちの絵の表現のヒントを搜した。それをもとにそれぞれが描いた絵のキャラクターや部分を切り出し、コラージュ、配置して全体の構成を決めて行った。色は今回も、白、黒、灰色のモノトーンを基調として、小さいサイズの壁画を制作、数枚の絵をプロジェクターで投影、ゲルニカサイズにした絵のキャラクターや部分を切り出し、輪郭をキャンバスに書き写して彩色した。町や人々を襲う戦争、悪の象徴、空爆する飛行機から人々を守る善の象徴が単純なデザインで構成され、ゲルニカの思想を受け継いでいた。(参照：p.194図版)



キッズゲルニカ・フランス・パリ・ポンピドーセンター (2009)

日本・東京・東久留米市立神宝小学校でのワークショップでは、5年生の図工担当教諭細田和子は、授業で、子どもたちに地域を題材にした木版画作りを指導、そこからゲルニカサイズの版画作品にすることを考えた。1日の制作期間で完成させる作品もあるが、この巨大な版画制作を子どもたちと始めたのが1997年、版画が完成したのが1999年と長い期間をかけた、ゆっくりとした制作であった。中心に大きな木をすえ、その周り



で子どもが遊び、版画制作をする、地域の題材、お地蔵さん、犬、鳥、野にいる兎、平和の象徴のユニコーンなど、お伽話のような作品が完成した。(参照：カラー図版)

持続する平和教育と芸術の融合は、細田の指導する版画、スタンプの手法と生命の木を描くテーマでのワークショップ・スタイルとなり、参加した子どもたちが成長して大学生になって、地域との連携、次のキッズゲルニカ制作の企画、子どもの指導を行った。次世代への橋渡しが成功した例であった。

京都教育大学教育学部附属養護学校でのワークショップ（1998）に参加したのは、ハンディキャップのある子どもたちであった。身体的ハンディキャップ、心的ストレス、脳性マヒなど様々なハンディキャップを持つ子どもたちは、まず、ボディーペインティングで、キャンバスの上の絵の具を身体で伸ばし拡げ、それぞれ思いつくものを描いた。上書きで、前に描いた絵が消えることもあるが、抽象絵画風の作品が完成した。遊びと作品制作、参加する楽しさ、喜びを享受できるワークショップになった。(参照：カラー図版)

下地の絵の具と上書きの絵の線が、「ゲルニカ」のラインに似てきたのは偶然ではあったが、クエートの作品にも同様の偶然のラインが見える。その他にも「ゲルニカ」の参照、検証をした作品も生まれている。広島原爆投下爆心地の小学校でのワークショップ（1999）において、子どもたちは原爆ドームとサダコ<sup>5)</sup>の像と折り鶴をテーマに平和を訴えることを考えた。構図は、「ゲルニカ」の絵の配置を参照することにした。繋いだ下絵用の模造紙に、プロジェクターから「ゲルニカ」を投影して、構図を写し取った後、原爆ドームとサダコの像と折り鶴を配置して、平和の願いを込めた。(参照：カラー図版)

広島県福山市の盈進中学校は、毎年、平和教育の一環として、キッズゲルニカを制作している。2006年、全く同じレプリカ制作を行い、「ゲルニカ」を体験、検証しようとした作品であった。(参照：カラー図版)

オーストラリア・ウロンゴン大学のイアン・ブラウンIan Brownは、1997年からワークショップを続けている一人で、2005年のワークショップでは、絹地に「ゲルニカ」のカラー版を子どもたちと完成させた。バリ島での展覧会（2005）で、野外展示中にスコール（強いにわか雨）に遭い、捺染を施していなかったため、色が流れてしまった。子どもたちは、再度、制作する計画を持っている。(参照：カラー図版)

スペイン・ゲルニカでのワークショップ（2003）では、左右に「戦争」と「平和」の世界を描き分け、「ピカソのゲルニカ」の部分を引用し、広島原爆を描いている。(参照：カラー図版)

現在、ゲルニカでは、「ゲルニカ」の参照作品のプロジェクト“GERNIKA-GUERNICA” SOURCE OF TO ART AND CULTURE 2010-2012<sup>6)</sup>を行っている。

## キッズゲルニカ・プロジェクトの再出発

20世紀の終わりにキッズゲルニカ・プロジェクトの終了、アート・ジャパンとして、最後の展覧会が計画された。2000年12月、ネパール・カトマンズ市で、ラビンドラ国王の開会宣言によって、60点のキッズゲルニカを野外広場に展示する展覧会、シンポジウム、子どもたちとの交流が始まった。展覧会最終日に、首都カトマンズで暴動が起った。戒厳令が布かれ、外出できない状態となり、参加した世界の子どもたちとネパールの子どもの交流会は中止となった。外出できない参加者の子どもたちは、ホテルの中庭で子どもサミットを開催して意見交換を行った。フランス、イタリア、インド、台湾、ネパール、日本の子どもたちは、大人の英語を共通語とした母国語通訳で、議論を展開した。

平和を願って、集まったカトマンズでこのような紛争が起こり、世界にはまだまだ戦争や紛争、対立が残っている。なぜ、キッズゲルニカをやめるのかという疑問を大人に投げかけた。資金がないのなら、古新聞を集めて資金を作るなど、色々な意見が続出、そして、キッズゲルニカを継続すべきだという子どもサミット宣言をした。

その夜、大人のスタッフが集まり、子どもたちの意見を尊重すべきとの意見が大勢を占め、アート・ジャパンの行ってきた活動はここで終了して、世界各地でワークショップを開催してきた人間が構成メンバーとなる、国際委員会を新しく作り、第2期のキッズゲルニカ・プロジェクトを開始することにした。

イタリアからアルプスでの展覧会の提案があり、2001年11月から2002年4月までイタリア・クロンプラッツKronplatzのスキー場の山頂、ロッジに60点の作品が展示され、10万人以上のスキー客が鑑賞した。(参照：p.196図版)



キッズゲルニカ・イタリア・クロンプラッツ展覧会 (2001)

ネパールでの暴動は、アジアで人気のあるイケメンのインド映画の人気スターが、インタビューに「ネパール人は嫌いだ」と言ったというデマを信じたファンが、インド大使館に抗議に出かけたことが発端であった。インド大使館は、官庁街、政府のビルのあ



るところで、警察が取り締りを強化していた。ネパール、インド、パキスタンには、カーストの身分制度、差別が残っているのと貧富の差による不満が国民の底辺に存在していた。反政府の活動をする人もいる中で、取り締まる警官隊との衝突が起こった。投石に対して、警察が発砲した弾が、商店の中にいた少女に当たり死亡、政府への不満が一気に爆発、外資系会社、貴金属店、商店を襲う惨事となった。その6ヶ月後、穏健なラビンドラ国王夫妻が、結婚を反対された王子の銃撃によって死ぬという事件も起こった。ネパール展に参加した子どもたちは、さらに誤解による憎しみという現実と直面し、戸惑いながらもキッズゲルニカ・プロジェクトに参加、成長して行った。

国際委員会形式になって以降、日本では美術教材に掲載され、平和教育と美術教育の観点から学校としての取組むところが増え、国際委員会メンバーもワークショップ、展覧会を開催、キッズゲルニカ作品はさらに増え続けている。

## キッズゲルニカ・ワークショップと美術教育、その発展性

2005年の中国・上海市浦東新区香山小学校でのワークショップでは、裕福な階層の住む地区での開催ということで準備や関連イベント、セレモニーの管理が行き届いていた。上海タワーの近代中国と歴史上の正義の勇者を描く、朱色を基調とした水墨画による壁画を数時間で完成させた。2年後、上海でのワークショップが再度計画された。成長著しい中国の共産主義体制における思想統制、放送・情報の規制の厳しい中では、今回も、自由な発想は生まれてこないのではないかと思われたが、上海市徐悲鴻芸術幼稚園でのワークショップ（2007）では、新しい発見、希望があった。

私立で、いくつかの幼稚園を運営する学校のその中の一つ、徐悲鴻芸術幼稚園は、名前に芸術がある通り、子どもたちに芸術面で特化した教育を行っていた。創始者は、馬の絵を題材に描く、高名な水墨画の画家で、幼稚園のシンボルマークも馬であった。6才の年長組から絵の好きな夏休みに参加できる子が集まった。

和平（平和）のイメージを沢山の馬が集まることで表現することになり、白いキャンバスに墨汁で、馬の輪郭を描いて行った。100頭の馬を描くことを目標に、子どもたちは大小の馬を描いて行くが、キャンバスの四方から描くので、馬の天地はバラバラ、逆の位置になるが、子どもたちは何の躊躇もなく描き続けて下絵を完成させた。色を塗る段になって、日本の子どもたちでは、自分の描いた下絵は最後まで自分が彩色して完成させるという所有権的なものが生まれてくる。場合によっては、いがみ合い、争い、ケンカに発展する。

この幼稚園の子どもたちは、塗りたい馬から塗りやすい部分から塗り始めた。その色は、馬は茶色という日本の子どもたちの固定観念を覆す、黄色、青、緑、茶色、ピンク

という色を塗っていく。馬全体を同一色で塗るのではなく、頭、首、胴、足の色が違う、カラフルな不思議な馬が完成して行った。また一頭を一人で仕上げるのではなく、空いている馬の部分があると感覚的なひらめきがあるかのように、好きな色を塗りに行くというものであった。子どもたちは、協力して、部分から大きな全体の絵を完成させた。(参照：カラー図版)

幼稚園での授業と施設を見学させてもらった。絵画の教室には、小さなイーゼルと椅子のセットがあり、デッサンからクレヨン、色鉛筆、水彩絵の具、水墨画などの技法を学んでいる。版画や工作、切り絵、その他の色々な技法を使った作品を廊下に展示していた。中国の歴史を芸術・文化面で学ぶ、小さな博物館、展示室があり、古来の美術作品、伝統工芸品、衣装、民芸品、作家の作品を展示していた。大学のギャラリーにも引けを取らない構成であった。

遊戯室のような教室には、色々なおもちゃ、人形、自動車、汽車、家の模型、果物などのレプリカがあり、自由に手にとって遊ぶことができる。アーチと柵で仕切られた場所は、キッズニア<sup>7)</sup>のように、お店屋さんごっこなどの役割を学ぶことができる。トランプやゲーム盤、双六、モノポリーなど世界の色々な国のゲームが集められていた。ゲームに関して、囲碁、将棋盤が備え付けられた机と椅子のある部屋、鏡張りのバレエ、ダンスのレッスン室、ピアノ、楽器を演奏できる音楽室など、絵画以外の芸術も学ぶことができる体制になっていた。中国では、英語教育が熱心に行われているが、この幼稚園でも英語教育の一環として、階段一段一段に英単語のスペルが書かれていた。子どもは発音しながら階段を上っていた。

ここは芸術に関する英才教育を行う幼稚園であるのだが、系列の幼稚園では別の取り組みをしている。しかし優秀な子どもを選抜して入園させているのではなく、4才から6才の普通の子どもが通い、成長し、自由な発想で温かい心をもった子どもに成長して行っている。公立校は授業料無料の中国にあって、私立幼稚園の高い授業を払える層は、まだ多くない。2005年のワークショップをした香山小学校もエリート層の通う学校で、我々を歓迎するイベントでは、バレエや楽器演奏、歌、組み体操など披露した。このような学校は多くはない。小学校に入学してからの指導体制がどのようになるのかによって、才能が埋もれてしまう可能性もある。

## 「文化のイクオリティ（平等性）」と「ノーマライゼーション（等生化）」の実践

### 目の見えない子どもたちのワークショップ

インド東部、人口1400万人の都市コルカタ市Kolkata（旧称カルカッタ）にあるブラインド・ボーイズ・アカデミーBlind Boys Academy（ラマクリシュナ財団）は、全盲の

子どもから強度の弱視の子どもが学ぶ、寄宿舎制の学校である。広大な敷地の中には、目の見えない子どもの学校から木工、旋盤を学ぶ職業訓練所、女性が学ぶ学校、大学、病院、農場、牧場、それぞれの寄宿舎の建物があり、自給自足の体制をとっている。

2007年の大手前大学キッズゲルニカ展<sup>8)</sup>で、目の見えない子どもの作品展示、シンポジウムでの発表があった。目の見えない子どもが絵を描くことができるのかという疑問を持って、2010年3月8日から11日の4日間、前回、指導したオシット・ポダールAsit Poddar（画家・写真家）と一緒にブラインド・ボーイズ・アカデミーのワークショップに参加した。10才から学ぶ、この学校では、校内を歩くときは、2人一組または3人一組になっている。一人は全盲の子ども、もう一人は弱視で少しは見える子どもで、助け合って行く体制になっている。私たちよりも軽快に階段を上り下りしていた。

これは、美術教育というより物の理解、空間認識教育の成果が大きい。日本では、点字の読み書きを重要視するが、ここでは手で物に触るという教育を行っていた。美術のデッサンに使う人の石膏像は、ネール首相、タゴールなどの像もあり、それに触って顔の輪郭、特徴を覚える。車は、自動車、バス、消防車など、家の例では、キリスト教教会、イスラム教モスク、仏教寺院、ドールハウスのような部屋を分割した模型、ブランコ、滑り台、砂場のある広場など、果物、野菜、魚などの模型に触って形を覚え、名称と同時に色の概念の情報も一緒に覚える。実物の香辛料の材料は、元の形と大きさを知り、磨る道具を実際に使い磨って作業と匂いの情報として受け入れる。それによって頭の中で、バーチャル・リアリティーVirtual Reality（仮想現実）の空間認識と機能理解をしている。

絵画の授業では、ひもで物の形を作り、画用紙に貼り、点字で色分けされたクレヨンを使って、ひもの輪郭内を塗るという制作方法を学ぶものであった。前回のワークショップ作品はこの手法であった。コンピューター入力の練習は、まさに本当のブラインドタッチで、スキャナーで読み込んだ文字情報を音声変換装置で変換、ヘッドフォンで聴くシステムを使用していた。（参照：p.206図版）

今回のワークショップでは、端切れを使って、布の切り絵制作を行った。少し見える子どもは、目に近付けて色と形を確認しながらハサミを使って布を切り、画板の上で他の布と大きさ、位置関係をチェックして、キャンバスに糊づけした。全盲の子どもは、見える子に手伝ってもらい、自分で切った布の色と形を確認して作品を制作した。三次元空間の認識、感覚があるから、二次元にした時の形、向きなどの構成が出来ている。作品には、馬、ラクダ、象、鳥の生き物、手を挙げる子どもと大人、果物や色々な葉がある木々、インド国旗、他の国の国旗などが描かれた。黒のキャンバスに、落ちつた色合いのメルヘンな作品が完成した。（参照：p.207、208、カラー図版）

学校の周囲を囲む塀の外に出ると発展途上の活気ある街中には、三輪タクシー、人力

車、バイク、車が先を争うように走っていた。ここで教育を受けた目の見えない子どもたちが街中へ出て生活が出来るかというとは相当厳しいものがある。ただ、ここでの実践は子どもたちの生きていく可能性を生み出していた。

## 貧富の差による参加の機会からの脱却

コルカタ市から150km、汽車で2時間30分のところにあるシャーンティニケタン Santiniketanには、ノーベル文学賞を受賞したインドの詩聖タゴール Rabindranath Tagore (1861-1941)<sup>8)</sup> が設立したビショ・バロティ大学（通称タゴール国際大学）がある。全人格的教育を理想としたタゴール国際大学芸術学部で学ぶ、ポダール氏の長男 スキッド・ポダール Sukrit Poddar は、近くのプランティック Prantik の村に居住している。この村は、ベンガル地方の典型的なインド人といわれる種族が暮らしているが、生活はシャーンティニケタンの街に比べて良い方ではない。周辺には、都市部の裕福な層が、週末や休暇に利用する立派な別荘が建ち出し、周囲は塀で囲われ、ガードマンが警備するが、家々には人の住んでいる気配はなかった。

スキッド・ポダールは、1996年のワークショップに6才で参加した。父親と一緒に、2000年のネパール・カトマンズ展、2007年の大手前大学での展覧会、シンポジウム<sup>9)</sup>、ワークショップにも参加した。成長したスキッドは、指導する立場になって、大きな絵を描いた経験のない子どもたちにキッズゲルニカの趣旨を説明、ペットボトルを切って、パレット、筆洗を作ることから始めた。子どもたちは自分の周りの自然、生活を世界の子どもに見てもらうことにした。

朝7時から準備をしてワークショップを始めるが、3月の初旬でも11時には40度近くになるので3時まで休憩をするという制作環境であった。年長の子どもが、紙に下絵を描いてからキャンバスに写すのではなく、下絵を作らずに、直接、墨汁で輪郭を描き、キャンバスに下絵を描いた。色塗りには、小さな子どもも参加できるようにした。墨汁だけの下絵でも水墨画のような、ゲルニカのモノトーンの雰囲気作品に見え、ヨーロッパの子どものデザイン性に優れた作品との共通点が感じられたが、子どもたちは色を塗ることに集中した。村には、牛、山羊、ニワトリ、犬が飼われている。それらの動物、植物、建物の色は、日本で見るものとは違い、独特の色合いがあり、子どもたちはその色を塗っていた。同じ暑い国のチリの作品のような強烈な赤や黄色、青が塗られるのではなく、ピンクや肌色の道、淡い青空になっていた。(参照：p.209、210図版)

## インドの子どもたちの撮影した作品

ブラインド・ボーイ・アカデミーでは、子どもたちは、記録に写真とビデオ撮影をする私に興味を持ち、どの子もファインダーを覗き込みにくるので、ビデオカメラは自由にズームやパン（首振り）撮影をさせた。目の見えない子は、液晶モニターファインダーに目押し付け、映像を確認していた。ズームに慣れてくるとカメラマンの子、被写体・俳優の子、ポーズの指示を出す監督の子と役割分担がされるようになった。実際に子どもたちが撮影していた映像は、ブレが大きく、ズームの繰り返しで、私たちが見るには気分が悪くなるような映像であった。しかし、子どもたちは、自分で被写体を認識し、映像を記録しようとパンやズームを試みていた。液晶モニターファインダーの工夫をすれば、また映像の理論を教えれば、作品が作れる可能性はある。アニメ制作にも挑戦させたいと感じた。

プランティックの村でも、ブラインド・ボーイ・アカデミーでの子どもたちと同じに、子どもたちは、ファインダーを覗きにきた。一眼レフ・デジタルカメラで撮影した画像は、すぐ見ることが出来るので、写された子どもは、恥ずかしがったり、喜んだりしていた。画像を液晶モニターで見るために、カメラ本体を持たせると私がやるのと同じようにファインダーを覗き、カメラアングルを変えていた。そこで予備に持っているコンパクト・デジタルカメラに三脚をつけ、シャッターの押し方を教え、自由に撮影をさせた。子どもたちの撮影した作品は、私の撮影したものより生き生きとした表情を捉えていた。一生触ることの無かったかもしれないカメラを使って撮影した自分の作品を見る経験は、何か、子どもたちの意識を変えるきっかけにはなった。これをどのようにつなげていくのかは、キッズゲルニカ・プロジェクトと同じ問題である。（参照：p.211図版）

## まとめ

以前、勤めていた博物館では、映画フィルムを収集するフィルム・アーカイブがあり、その映画作品の上映を行っていた。サイレント時代の作品のプログラム上映で、映画を学び、研究しようとする学生が、あの喋っている年寄りに注意をして欲しいと言ってきた。サイレント映画の上映は、活動弁士・映画説明者、和洋合奏団の演奏、解説付きで行われるのが普通だが、当時の映画説明、音楽の資料、情報がないのと、この映画に行われていた映画説明、演奏の再現ができない状態だった。違うものを再演する弊害、現在、再演している人も当時の沢山いた中の一人のスタイルの継承、物真似であるために、当時の物と誤解することと音声、音楽の影響力が、映像の表現に優っているために、映

像表現以上の心理的効果が出てしまうなどの問題、実演経費の問題もあり、特別のイベント再演以外は無音で上映をしていた。

学生には、あの二人はどのような関係なのか、何をしているのか、観察、想像することを頼んだ。一人は、もう目の見えなくなった老人で、もう一人が、映画の場면을話していた。過去に見た映画の場면을思い出していたのかもしれないし、初めてみる映画を想像していたのかもしれない。元々、サイレント映画は、音声のないものを映画説明者が音声で解説した。情報の不足を補い、鑑賞者は想像して、楽しんでいた。学生には、映像の構成、表現とは何なのか、フィルムに傷の入った映画でも、音がない映画でも、面白い場面では笑い、悲しい場面では泣き、感動し、ワクワクする。見えない多様な観客に向けて、監督は、コミュニケーションの手段として、映像メディアを通じてメッセージを工夫し出し続けている。

やはり以前、教えていた大学に、アメリカから日本に留学していた全盲の学生が、映画を制作しているというので、制作方法を尋ねたことがある。その学生は、耳から聞こえる音情報で、空間を認識し、その場にいる人や状況を感じ取って、目の見えるカメラマンに撮影する方向、タイミング、撮影時間の指示を出していた。編集も撮影された映像の状況の説明を受け、記録された音情報と合わせて作品にしていた。ある種の感性の記録であった。

盲目のエッセイスト三宮麻由子は、私たち目の見える者に「与えられた感性を磨く」ことを勧めている。また盲目のIBM研究員浅川智恵子は、目の見えない人のコンピューター、インターネット利用のためのWebページのプログラミングを研究している。如何にWeb情報を理解しやすい音声情報に置き換えるか、Web制作者が、ノーマライゼーションを考えたWebを作るかを訴えている。

映画、テレビの発達は、3D立体映像のオンパレードである。映画、アニメ、ゲームの3D化作品の公開、販売は増え、裸眼3Dモニターが発売された。バーチャル・リアリティ（仮想現実）空間における創作、鑑賞、利用は、目が見えなければ立体視の体験ができない。片方の目しか見えない人でも同じである。

イタリアの2000年の作品に、衣服の部分に布を貼り、髪の毛の部分に毛糸を貼った作品があった。触れるキッズゲルニカ、触って感じるキッズゲルニカ、飛び出す3次元空間作品に進化したと感じたが、目が見えなければ、その部分のあることは認識できない。手で触ることによって素材感を得ることは出来るが、全体像は分からない。

キッズゲルニカ国際こども平和壁画制作プロジェクトは、異文化理解、平和教育、美術教育のコミュニケーションの手段として、続いているが、視覚に頼らない新しい表現方法、三次元空間認識能力、想像力に新しい技術なども組み合わせることによって、「文化のイクオリティequality（平等性）」と「ノーマライゼーションnormalization（等



生化)」を実現する可能性、希望はまだまだあることと、世界のどこかで、次の世代が新しい試みを行っていることを発見することができた。

注：

- 1) キュビズムCubism 20世紀初頭、ピカソとジョルジュ・ブラックによって創始された表現方法。一つの視点からの表現だけでなく、複数の視点からの表現、色々な角度から見た形を一つの画面に描く。
- 2) アルテ (Arte, Association Relative a la Television Europeenne) ドイツ・フランス共同出資で1992年に開局したテレビ局で、フランス語とドイツ語でヨーロッパを中心に放送している。主な番組：Abenteuer Arte, Arte Europa, Arte Info (情報番組), Arte Kultur (カルチャー番組), Die Nacht/La Nuit (報道番組), Top of The Pops トップ・オブ・ザ・ポップス (BBC) 生放送音楽番組の再放送で、芸術・文化の映像情報を提供している。
- 3) 「子どもの権利条約Convention on The Rights of the Child」各国は、児童が、人種、言語、宗教、政治的に差別を受けず、生きること、自由に表現、平等に教育を受け、文化的及び芸術的生活に参加、経済的な搾取から保護され、非人道的な扱いを受けないことなどの権利を保障する条約。1989年11月20日国連総会で採択され、1990年国際条約として発効。日本は1994年4月22日に158番目に批准し、5月22日に発効した。現在、192カ国が批准。批准していないのはアメリカ合衆国とソマリア共和国のみである。  
<http://www.unicef.or.jp/crc/index.html>
- 4) 3D GuernicaドイツのアーティストLena Giesekeが、「ゲルニカ」をコンピュータ・グラフィックによって、3D立体化した作品。絵の中に入り、逆方向など複数の視点から見るができる。  
You Tubeで、3D Guernicaを検索<http://www.lena-gieseke.com>  
<http://japan.digitaldj-network.com/archives/51552471.html>、
- 5) サダコの像と折り鶴 2才の時に広島に投下された原子爆弾によって被爆した佐々木禎子(1943年1月7日 - 1955年10月25日)は、病院で千羽鶴を折り続ければ病気が治ると信じて、葉の包み紙などで鶴を折りつづけたが、亜急性リンパ線白血病で亡くなった。広島平和公園にある原爆の子の像のモデルとなった。日本では鶴は平和のシンボルではなく、「鶴は千年、亀は万年」と寿命を楽しむという中国の神仙伝説から長寿のシンボルであった。病気回復、長寿を願って病気見舞いに千羽鶴を贈った。サダコの像に、千羽鶴が贈られるようになって、現在は平和のシンボルになった。
- 6) “GERNIKA-GUERNICA” SOURCE OF TO ART AND CULTURE 2010-2012  
スペインのゲルニカでは、「ゲルニカ」の参照作品のプロジェクトを行っている。「ゲルニカ」から触発された作品の紹介、制作などを行う。  
<http://www.guernica2012.org>
- 7) キッズニアKidZania 1999年メキシコから世界中に展開されている、子ども向けの職業体験型テーマパーク。日本第2号施設としてキッズニア甲子園が、2009年3月らばーと甲子園内に開業。子どもが、お店の店員や消防士などの仕事を実際に体験できる。職業体験型展示は、アメリカのチルドレンズ・ミュージアムには、どこでもある。「私のしごと館」は、運営形態、展示思想に問題があったが、廃止されたのは残念である。
- 8) ラビンドラナート・タゴールRabindranath Tagore (1861-1941) インドの詩人、思想家。ベンガル語の詩集「タゴール詩集ギーターンジャリ」(岩波文庫)を自ら英訳。1913年アジア人として初のノーベル文学賞を受賞。シャーンティニケタンに野外学校を設立。現在・ビショ・パロティ大学(通称タゴール国際大学)。平和教育を称賛。日本に関心が深



く、日本人の自然を愛する美意識を高く評価、岡倉天心、河口慧海、野口米次郎らと親交があった。

- 9) 大手前大学では、大手前学園創立60周年記念事業として、2007年8月に、中国・上海市の幼稚園、ベトナム・ハノイ市の孤児院、西宮市立春風小学校で、壁画制作のワークショップを開催、本学学生も指導参加、9月14日から18日には、いたみ稲野キャンパス体育館、さくら夙川キャンパス・アート・センター、CELLフォーラムでの展覧会、外国の子どもも参加したシンポジウムを開催した。

<http://www.otemae.ac.jp/about/activity/60th.html/>

#### 参考文献

- ピカソ「ゲルニカ」からのメッセージ 今村照廣 著 日本文教出版2005年3月20日発行  
ピースフルな子どもたち 日本ホリスティック教育協会 金田卓也、金香百合、平野慶次 編  
せせらぎ出版  
美術からの描画指導 ―アメリカDBAEの新しい指導法― B.ウィルソン、A.ハーウィッツ、  
M.ウィルソン 著 花篤實、岡崎昭夫、阿部寿文 訳 日本文教出版1998年4月1日発行  
2004年3月31日 発行  
ピカソ 愛と苦悩 「ゲルニカ」への道 東武美術館、朝日新聞 1995年 発行  
日本のビジュアルカルチャーと壁画的表現の可能性 阿部寿文、水口薫 著 大阪女子大学  
紀要第29号 2005年2月 発行

Kids' Guernica キッズゲルニカ国際委員会

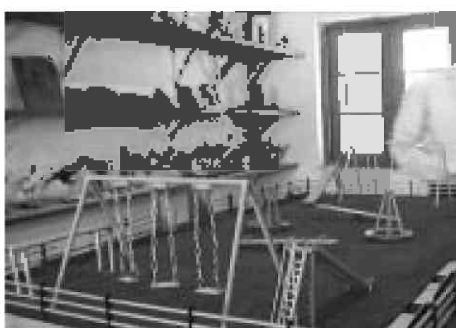
<http://kids-guernica-jp.blogspot.com/>

キッズゲルニカ国際こども平和壁画制作プロジェクト



ブラインド・ボーイズ・アカデミー ワークショップ 2007 インド・コルカタ市

図版 1



点字の読み書きだけでなく、文章音声変換ソフトを使い耳に入った音声をパソコンで入力する訓練を受けている。空間認識の授業として、触ることを重視している。果物、魚、建物、乗り物、彫像、公園・遊具、山、川、海などの自然模型が備えられている。下左は、鎖をつなぐ訓練。下右は、色々な香辛料に触り、磨り潰し、匂いを覚える。

図版 2

キッズゲルニカ国際こども平和壁画制作プロジェクト



ブラインド・ボーイズ・アカデミー ワークショップ 2010 インド・コルカタ市

図版 3





ブラインド・ボーイズ・アカデミー ワークショップ 2010 インド・コルカタ市

図版 4

キッズゲルニカ国際こども平和壁画制作プロジェクト



シャーンティニケタン（インド）のプランティックPrantik村のワークショップ（2010）  
元になる下絵なしで、年長の子どもが、直接、キャンバスに筆と墨汁で輪郭を描いた。

図版 5



大きな絵どころか、普段でも絵具を使って絵を描いたことのない小さな子どもも年長の子どもに教わりながら色付けをした。

図版 6





ブラインド・ボーイズ・アカデミー（インド）での弱視の子どもによるビデオ・カメラの撮影風景。監督と演者の関係、役割分担がすぐに生まれてきた。2010.3



シャーンティニケタン（インド）のプランティック Prantik 村の子どもによるデジタル・カメラとビデオ・カメラの撮影。大人の撮影風景、操作を真似て、アングル、シャッターチャンスを得、子どもの表情をうまく捉えた作品になった。（参照：カラー図版）

図版 7